慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ダービンの 民主的社会主義論
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1946
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.39, No.2 (1946. 8) ,p.168(50)- 174(56)
JaLC DOI	10.14991/001.19460800-0050
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19460800-0050

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

ダービンの民主的社會主義論

氣賀健三

この本の趣旨は、標題の通り、民主々義的社會主義の政治理論を主張することにある。それは實際の問題としてはイギリスの勞働黨の政治經濟的見解を再吟味することになる。著者の結論は勞働黨の政策に贊成である。併しこの本の要點はこういふ結論にあるよりもむしろそれに達するまでの社會學的研究にある。而してその點において、我が國の社會主義經濟に關する研究と實踐は此本書から學ぶべきものがあると考へて、こゝにあへて紹介の筆をとる次第である。

序論では此書を出版する動機と方法が述べられる。次いで第一篇は「協力と闘爭」と題して心理學的な研究を略述する。第二篇は過渡期の資本主義と題して、既に成熟期に達して之以上發展の望みのないイギリス國民經濟の姿について診斷を下してゐる。第三篇はプロレタリアの獨裁といふ標題でマルクスの共産黨宣言の分析を行ふ。著者の態度は全體として否定的である。第四篇は社會主義と民主々義を取扱ふ。主として政治的方法としての民主々義の意義が説かれる。第五篇は民主々義的社會主義の戰略を論ずる。全卷の結論をなす部分で、當時のイギリス勞働黨の政策綱領に大體贊成してゐる。終りに附錄があつて、その中にナチスのドイツとボルシェビキのソ聯における政治的慘虐の事實が特に述べられてゐる。

之を以て判る通り全卷の結論はある纒つた體系的な著述の體裁をなしてゐない。心理學人間學的研究があり、經濟社會學的研究あり、政治學的研究があるといふ具合である。しかも本書の特徴は實に社會科學の諸部門の知識を協力させて、一つの問題「民主々義的社會主義」の主張を説き聞かせようとした點に存する。之について著者はかう考へてゐる。既に夥しい數に上つてゐる社會主義の文獻に、本來經濟學者たる自分が、專門外の研究を纒めて公けにするについては、實は自分として止むに止まれぬ理由があるのだ。自分はこの十年間を軍縮と國際聯盟の爲に働き、平和的民主々義の爲に活動したにもかゝはらず、世界の實狀は、自分の一生の間に果してこの希望を實現させてくれるかどうか頗る疑はしい處まで來てゐる。一九二九年の世界的不況は全歐米の政治經濟狀態を一變させ、國内的には經濟的不安が、對外的には政治的不安が急速に傳播し始めた。恐慌の當時に政權を擔つてゐた政府は、保守的であらうと進歩的であらうと、無差別に、多くの場合非合理的に非難され、破壞されてしまつた。そして今日では(一九四〇年當時)、ソ聯・ドイツを始めとしてイタリー・日本・スペイン・ユーゴー・ブルガリア其他の國々に專制的政府の勢力が顯著に增大してゐる。

だが併し自分は希望を失はない。もう少しの理性と、もう少しの勇氣とを以てすれば、少くとも歐洲において民主々義諸國が國際聯盟の權威を無限の期間に亙つて再び確立し得るとする信念を棄てることはできない。けれども自分はこゝでは外交政策を論ずる積りはない。むしろ科學的に何故こういふ事態が生じたか。どういふ社會で自由と平和と友愛の理想を兼ね併せて實現しうるであらうかといふ問題を解明し、而して現實の上に將來の爲の政策を立てたいと。

かゝる具體的な問題を科學的に取扱はうといふ見地から、一面的な觀察の不備を意識して、諸社會科學の協力を考へる。その努力は即ち心理學から政治學、經濟學に亙る綜合的判斷となつて現れた譯である。

著者が熱烈に希望した民主々義の理想は、第二次の世界大戰といふ頗る遺憾な犧牲を拂つて、漸く一歩前進した觀がある。併し理想達成への途が平坦になつたとは未だいひ切ることができない。といふのは戰後に政治的な問題が殘つてゐるといふことばかりでなく、それ以上に、いな、かゝる未解決な政治問題を跡に殘してゐることに密接な繋りのある問題として、今日の資本主義經濟體制の行衞が具體的な政治の面において論議の對象になつてゐるからである。

自由經濟か計畫經濟かとか、資本主義か社會主義かといふ問題は之まで二者擇一的に論ぜられ、今でも原理的に、或ひはイデオロギー的公式で以て說かれてはゐるが、實際の問題として之を考へるならば、原理や公式よりも、具體的に今日の資本主義經濟をどこからどう修正するかゞ取擧げられなければならないのである。

著者ダービンはこの點に着目して、現實的に現在の混沌たる事態を解決するにはどうしたらよいか。といふ問を發し、自ら之に答へて次の如き意味のことを說いてゐる。

「假に私有財產制の性質、起源、現在の意義、將來の豫想を研究しようとすれば、法律・一般史・經濟學・心理學・社會學・人間學等の援助なくしては、この制度をば現實の社會的存在のまゝに研究してゐるとはいふことができない。又この制度の將來について豫言をなし得る地位にあるともいふことができない。—現實の理解にはあらゆる分科々學の協力が必要である。個々に分立せしめるならば我々は失敗する。」

「我々の住んでゐる社會、その形態を改良しようと努めてゐるこの社會を構成してゐる個人の動機、制度、性質は經濟、政治又は一私人の一面のみに偏してゐるものでなく、三種の型の合成である。而してそれが現實に在る通り、性質上複雜で多種多樣であるまゝに研究しようとする者のみが之を理解し得るのである。」（原著二七—二九頁）

今日、社會主義經濟と資本主義經濟の比較を理論的に經濟の一面から論ずることは、イギリスの如き國においては正に現實から遊離し過ぎた感があるであらう。程度の差こそあるとしても、資本主義經濟の行詰りに直面してゐる國においては、いづれも同樣である。實際の社會には、理論的に考へる完全な自由經濟とか計畫經濟とか、或ひは又純粹の資本主義經濟とか社會主義經濟などゝいふものは在り得ないのであつて、二つの型の混合したものが或ひは他の型を交へたものが現實の姿である。又政治の面から考へても民主政治と專制政治とは原理的に相對立するとしても、現實の社會の運營に當つては、どこの國でも、純粹とか、眞正とかいふ意味で民主的であつたり、專制的であつたりするものはなく、兩種の要素の混在が見られるのである。

かゝる現實の姿の究明の爲に、そしてそれから具體的政策の結論を引出さうとする意圖の爲には、著者の態度は正に認められてよく、專門科學者が陷り勝ちな獨斷の弊を避けようとする精神は高く評價されなければならぬ。

併し著者のこの意圖が成功してゐるかどうかは別問題であり、又著者が利用、參照してゐる社會科學的知識の部門のみを以て、現實が十分に理解し得るとはいへないのである。

第一篇の心理學的研究に屬する部分は、著者の言葉によれば專ら協力者ボールビー氏（Bowlby）に據るもので、人間の占有慾的、鬪爭的衝動の不變性と之に對する平和的社會生活の爲の協力の政治形態の必要不可缺なことを說いてゐる。

この論證が心理學的に十分なものかどうかは紹介者のよく判斷し得ないところである。著者はこゝでその理想とする民主々義の爲の伏線を敷いてゐるのであるが、私の讀後感をいふならば、現代民主々義の論據をかゝる心理的本能論に求めることは餘りにも迂遠であつて、直接の關聯が薄く、むしろ哲學的な時代意識に據つて論ずる方が遙かに科學的ではないかと思ふのである。

第二篇は、イギリス國民經濟の分析である。注目を要する點は、此國の資本主義經濟が既に轉換期にあるといふ論證であつて、その一つに、資本家階級がこれまで果して來た資本蓄積の役割が既に終末に來てゐるといふ點である。

著者は資本主義の特徵を合理的技術、無限の獲得慾、生產手段の私有及び自由放任の原則に求める。而してその何れもが著しく變貌したことを論證する。此等の特徵を發揮した資本主義經濟は、經濟的福祉の增大に著しく貢獻したが、他方において社會的不安定と不平等とを激化し、經濟組織の上では次第に非彈力的になり、拘束を增し、貯蓄が衰へて來たのである。株式會社の發展は資本と經營の分離の傾向を促進し、累進課税の增大は英國の富者をして今日何等貯蓄に貢獻せしめ得ざる事態に立至つてゐる。貯蓄はむしろ中產階級に依存する部分が多く、しかも五十年前のプロレタリアは、現在五十年前にプチブルジョワと考へられた地位に移り變つて來てゐる。變遷の過程を通じてまだ不變なる性格と見られるものは、產業上の合理主義の精神と無限の獲得慾の動機である。

ダービンが總括的に提出する問題はかうである。資本主義經濟は硬化し、制限的になり不正なものになつてゐる。但し擴張は續いてゐるし、一應の安定はある。この經濟の上に立つ社會は不平等であり動搖してゐる。但し民主々義的、中產階級的であり保守的である。そこで何をなすべきか。「國家的に組織化された私有財產制の獨占資本主義」の上に立つて民主的資本主義經濟がその經濟を變更する目的と限界はどこにあるか。目的と手段の選擇において理性と

豫想が一役を演じ得る限りにおいて、民主的、平等主義の人はどんな手段を主張すべきか。

資本主義の長所たる合理主義と發展性とを、民主々義的要求たる安定と平等とに結びつける政策がダービンの答である。この答を説く前に、著者は第三篇で共產黨宣言の批判を行ふ。

著者がマルクス主義の中から取出す論點は唯物史觀と階級闘爭説とプロレタリア獨裁の三つのテーマに限られる。ダービンはこの共產主義の思想的核心が丁度ファシズムと同じ様に憎惡と暴虐に塗られてゐると見ることから判るやうに、之に對するその判斷は否定的である。唯物史觀についてはその一面的偏見を批難する。議論の中心は社會秩序の歴史的變化が經濟的原因を根本的なものとしながら唯一のものと見ないといふ史的唯物論の論旨の矛盾乃至は曖昧さに集められる。經濟的原因が重要であり、且つ總ての出來事に附着してゐることを强調するのは正しい。併し之だけが根本的又は決定的なものだとするのは正しくない。著者は原因の多元性を力説する。

ダービンの論旨は筆者も亦同感する所であるが、彼が「唯物的」といふ意味を「合理的な獲得慾に基く」といふ心理的な概念を以て解釋してゐることは率直に同意し難い。彼は人間の行動が獲得慾の動機のみから出るものでないことをば唯物史觀の一面性の批判の論據としてゐるが、かゝる解釋はマルクスの正しい解釋といふことはできないであらう。いな頗る幼稚な誤解であるといはなくてはなるまい。（唯物的といふ場合に問題になつてゐることは一つの社會關係としての生產力についてゞあると私は解釋してゐる。）

階級闘爭説については、彼は唯物史觀との論理的な聯關を否定する。ダービンが考へてゐるのは、一つに階級闘爭による説明が少しも事實と合致してゐないといふことゝ、協力が闘爭よりも社會生活上重要な役割を演じてゐることゝである。利害の對立があることは決して協力を妨げるものでなく、むしろ相對立する兩者が平和に提携する最も適當な途である。協力が社會生活の動態において演ずる役割は闘爭のそれ以上に重要である。

階級闘爭説の批判として協力の事實を持ち出すのは適切な批判にはならないであらう。それは單に表面的、現象的な解決でしかあり得ないからである。むしろ階級的對立そのことに批判の中心が移されなくてはなるまい。協力の事實が批判として意義を持つには、マルクスのいふ階級的對立それ自體の絶對性を論難する命題から生れて來たものでなければならぬ。

最後にプロレタリアの獨裁の問題が取上げられる。この命題も亦ダービンによれば階級闘爭説から必然的に導き出されるものではないと考へられる。革命、獨裁の途をとるか平和的改革の途を選ぶかは必然的の途ではないし、又歴史的事實に照しても、階級的革命と獨裁の理論は正しくないのである。イギリスのマルクス主義者ジョン・ストレチー（John Strachey）はプロレタリア獨裁の意味をば、丁度現代のイギリスがブルジョワ獨裁である關係を逆にしたやうなものであると説明してゐる一節を捉へて、之はいかにも解し難い説明であるとしてゐる。ストレチーの譬喩はいかにも不可解である。

ダービンの論旨は結局今日のロシアに見られる様な共產黨獨裁の方法が我々民主々義者の選ぶべからざる途であることをいはうとすることにある。彼の所論は民主々義のためへの理解を助けるけれども、マルクス主義の批判としては決して十分なものではない。

第四篇は民主々義と社會主義を論ずる。著者が抱懷する理想への最も適切な手段と考へるものである。筆者も亦この篇から最も多くを得ることができた。現代の日本の政治經濟の在り方について多くの示唆を與へるものとも思はれる部分である。

「民主々義とは政治の方法の問題であつて、ある特定の文明を指稱するものではない。それは法律の必要とその施行とをば自由と調和させやうとする試みである……」といふバセット（R. Bassett）の言葉を冒頭に引用して、著者は民主政治の意味と價値とを昂揚する。民主々義が一つの政治的方法であるといふのは私も正確な解釋であると考へるが、同時に重要なことはこの政治的方法を尊重する背後の思想がなほ一層重要ではないかと考へられる。筆者は、この背後思想こそはマルクスの階級闘爭論を排斥してその代りに社會的協力の可能性と必然性とを證明する論據となるものと思ふからである。

ダービンはその直面してゐる歐洲の戰亂を眺めて、民主々義の前途に不安を懷きながら、相手がこの途を守らぬならば、民主々義者も亦斷乎として、武力を以てさへ民主々義を破るものを破らなければならぬといふ民主々義の限界を説いてゐる。民主々義こそは文明の進歩への最も確實な

基礎であるといふ彼の信念は固い。

第五篇は民主々義的な社會主義の實現の爲の政策を論じた部分であり、結論においてイギリス勞働黨の政策に贊意を表してゐる。重要産業を有償的に國有化すること、最高國民經濟會議を設けること、社會改良的施設は社會主義化の後に本格的なものにすること、平等化課税を實施すること等が重要な政策の方向を示してゐる。而してこの程度の社會主義化が民主々義的に實行されると信ぜられるのである。

ダービンは卷末にナチス其他の獨裁國の暴虐の事實記錄をのせて、獨裁の非文明的狀態を讀者に刻みこまうとしてゐるやうである。獨裁を憎むのは感情の問題であつてかまはないが、之を學問的に批判するのは、この本では不十分である。民主々義の主張については、妥當・公正な論陣を張つてゐる。資本主義の變遷についても亦我々は學ぶものがある。併し著者の心理學的分析は社會科學の問題の性質から見て、適當ではないやうである。著者がこの方面にまで研究の領域を擴げた努力は尊重さるべきものであらうが、その成果は必ずしも讀者の高く評價する所ではないであらう。併しながら本文の冒頭に述べた通り、多方面に亙つて綜合的な研究成果を纏めた此書物は、專門的に偏して考へたがる我々の缺陷を矯正するものとして、又混亂の渦中にある日本國民經濟の再生の爲の政治方策を採る基礎的な一指針として、好き參考書となすことができるであらう。

前號（第三十九卷第一號）目次

現代の苦悶――再刊に際して…………野村兼太郎
利子動態說への回顧…………氣賀健三
資本主義經濟か社會主義經濟か…………千種義人
國民所得の統計的解析…………鈴木諒一
地方主義による地方産業の編成問題…………奥井復太郎

三田學會雜誌

慶應義塾經濟學會

論說

世界經濟はどうなるか…………永田清（一）
計畫經濟への道…………氣賀健三（三一）

資料

問屋と仲買――江戶材木商（社會經濟史資料紹介）…………野村兼太郎（四二）

書評

ヴァルガ「戰後世界工業發展の動向」…………山本登（五八）

第三十九卷
第三號